

私の保育

平野信子



何もかもが新しいできごとだった二年間が過ぎ、現在、私にとって二回目の四歳児三十人と毎日毎日遊び、走りまわっている。

この二年間、日に日に伸びている子どもたちに驚き、何とかその発達に追いついていこうと努力し、また子どもが子ども自身にもわからない何かを求めているとき、それがわからずに「どうしよう、どうしよう。何をしたらいいのかしら」と困ったり、子どもが私の話し方とそっくりに話をしているとうれしいような、半分恥ずかしいような妙な気持ちになったり、時に、私の生活態度自体「これでいいのかしら」と考え直させられたり……

……と、毎日を夢中に生活してきた。
この四月からは、二年間の反省をよく生かして保育をしよう
と、「子どもをよくみることを目標に六月まで過ごしてきた。

子どもたちは、ひとりひとりふしぎなくらいに違っていることにあらためて感心してしまった。「きょうは子どもとよく遊べたかしら」「○○ちゃんに対しての働きかけは、あれでよかったのかしら」と毎日、わからないことの連続であった。おまけに、六月になってから、子どもをほんとうには見ていなかったこと、子どもに大きな合図を送ってもらうまで、そのことに気づかなかったこと、など保育の大事なところを落としていたことがわかり、あせったり、困ったりしている。それで、四月から六月までの日々の記録をもとに、子どもと私との関係（つながり）について考え、反省してみたいと思う。

入園式で泣いていたY（男児に）ついて

四月十二日（一日目）

廊下で子どもたちを迎えていると、玄関からO先生にかかえられたYが泣きながら来る。大泣きをしているYを受けとり、抱きながら他の子どもたちを迎え入れる。しばらくすると、泣いているYを見て、Sも泣き始める。Y、Sの二人をかかえていると、O先生が

「たいへんでしょう」

「Yちゃん、お花に水をやるの、お手伝いしてくださいな」といってYをつれていってくださる。しばらくして、Yはさっぱりした顔をして帰ってくる。(花に水をやるのを見ていたとのこと)へやにはいるが、すみのいすにすわりほかの子どもが遊ぶのを見ている。何回か遊びに誘うが「いや〜ん」と半泣きの声を出してすわっている。すみからすみへと、時々移っていたようである。

四月十三日(二日目)

——昨日の状態から、母親にしばらくいてもらったほうがよいと考えた——

玄関で待っている。Yがぐずぐずいい出したので、「Yちゃん、おかあさんにYちゃんのおへやを見てもらいましょうね。」

『スリッパここよ』って、おかあさんに教えてあげて」と話しかけ、母親に戸口の側のいすにしばらくの間、すわってもらう。

Yは母親にくっついていてたが、しばらくするとレール・セツトを出してきて、レールを敷き、電車を走らせて遊び始める。様子を見てから、「おかあさん、今度は家で待っていてくださいね」と帰ってもらう。「ママのところ〜」と泣き始めるので、

ママは家でYを待っていること、

必ず迎えにきてくれること、を話す。

Yを抱いていると、「どうしたの?」「この子泣いているよ」と子どもたちが寄ってくる。

YにつられてベソをかいたK。一生懸命にYの頭をなでているM、母親と離れることが不安で、家にあるのと同じレゴで遊ぶのが精一杯のSが黙ってYにレゴをさし出している。……子どもたちがそれぞれにからだ全体を使ってYのことを気づかっている。——以前は、子どもが泣くと私自身どうしてよいかわからずに、いっしょに泣きたいような気持になったが、Yは泣きたいだけ泣いていいのだ。と考えると、落ちついていることができた。——そのうちに泣き声が次第に弱まり、すわり心地が悪いのか、ひざの上でもそもそ動き始めた。——やっと動いてくれた。今度は、いつひざからおろしたらよいのだろうか——と考えながら抱いている。

Yはほかの子どもが遊んでいる様子を見ているようである。

そこへボールを持ったM子がきて私の手にさわりながら「この子、赤ちゃん？」と聞く。「どうして？ Yちゃんは四歳のおにいさんよ。赤ちゃんじゃないのよ。ちょっと泣きたかったけど、もうだいじょうぶ」とひざからおろすと、Yは立った。

四月十四日

子どもたちを迎えようと玄関へ行くと、Yが泣いている。私の顔を見ると、母親は「お願いします」と足早に帰る。——私の予定としては、きょうも少しの間保育室にいてほしいと思っていた——

「ママのところへいくう」と泣くが、泣き方が、昨日よりも弱い。しばらくすると泣きやみ、へやのすみにへばりついて、ほかの子どもたちの遊んでいる様子を見ている。

回転すべり台へ行こう、と誘うと、「いや」とかぶりをふるが、みんなと少し離れてぶらぶらしながらついてくる。すべり台で、手で、トンネル、ふみきりを作って遊んでいるうちに、Yのことをポッと忘れてしまっていた。

後ろから、トンと誰かが私の背中をたたいた。「え？」とふり返るが、どの子どもがたたいたのかわからない。また遊んでいると、さっきよりも少し強くドン、ふり返るとYが立っていた。「合図していたのYちゃん？」ときくと、口が少し笑う。

「Yちゃんもすべり台いっしょにすべりましょうか」と誘うと、「いっくん」とおこったように言い、身を後ろに引く。

次第に強くドン、ドンとたたき、それに対する私の反応（あれ？）とふり返ってYを見るをくりかえし楽しんでた。

——少しずつ楽しさが心の中にはいつてくるようである——

四日目から、Yは泣かずにひとりであることができるようになった。

幼稚園にはいることに抵抗を示したYも、このようにしてはいることができるようになり、日を追って落ちついていった。

保育室、屋上、砂場などの遊び場が分かれている私の幼稚園では、遊びから遊びへ移るとき、ほかの園よりも大急ぎで走らねばならない。そのため、しばらくの間私にくっついていたSから「先生、そんなに走ると、ぼくくたびれちゃうよ」と言われてしまったが、朝、それぞれの子どもの特有のしかたで受け入れ（あいさつ）をしておく、安心して一日の遊びを始めることができるようになった。

私は、遊べない子どもといっしょに遊ぶことに全力を注いだ。ままとで、十人以上の子どもにパンをトースターで焼き、バターをぬり、ジャムをつけて食べさせたり（からっぽの手でまねを）砂場で子どもといっしょに山をつくり、高速道路をつくり、……楽しくなり、保育者であることをうっかり忘れてし

まい、思い出してハツとしたり……。

家で取れたボタンを「平野先生につけてもらうんだ」と手に持って登園した子ども。(幼稚園でとれたボタンは、いつもつけている)……「ママ、お迎え遅く来て、(先生と)長いこと手をつないでいられるから……」と頼んだ子ども。そして五日になって、おべんとうを食べたあと、「ねえ、おかあさん……」と私に話しかけた子ども。——やっと、おかあさんって間違えてくれた。とうれしくなってしまった——

このようにして私と子どもとのつながりも一応でき、友だち関係もひろがりだしたので、これからは堀合先生がいつも言っておられる「遊びの中にはいって、ひとりひとりをのばしていく」時期なのだと考え、子どものアイデアのふくらませ方、材料の出し方、などを考え始めていた。

子どもたちは、遊びを見つけ、それぞれに楽しんでいるように見えたのだが——。

六月十八日

子どもを迎えていると、Sがほかの子どもの母親につれてこられる。どうしたのかと見ると、顔の表情がいつになく固い。

「おはよう」とあいさつをしても何も言わずに、からだを固くする。「どうしたの?」ときいてみると泣き始める。へやには

いったら、友だちもいるから落ちつくかしら、とはいろうとすると、からだをキュッと固くし、その場にすわりこむ。

私もそこにすわりこみSを抱く。子どもたちが「先生、Sちゃんどうして泣いているの?」「どうしたの?」と心配そうにのぞきこんだり、頭をなでたりしてくれた。——Sをひぎにのせたまま、保育室の中を見ると、今まで感じたことがないほどつまらないへやに見えてきた。子どもの背の高さになって物を見ることは、入園式の前にただけで、その後は忘れていたことを思い出す——

しばらくしてSは泣きやむ。Kがクレパスでかいた絵とハサミを持って、私たちがすわっている隣りにすわりこみ、絵を切りぬき始めた。切りくずをみていると、船の形をしているので、「あ、船みたいね」と言い、床板のすき間に立てる。「次は何かな」「あ、白鳥かな?」S「ちがうよ。あひるだよ」と初めて口をきく。「あ、そうね、ガーガーあひるさんね」手に持っていたそれをSにわたすと、受けとり、船の横に立てる。次にSは小さな紙切れを拾い、「おさかなさんだよ」「船に『こんにちは』しにきたのかな?」ほかの子どもたちも、何をしているのかとのぞきに來ては、おもいおもいにかいたものを持って遊びにはいつてくるので、にぎやかになってくる。——床板のすき間に立てて動かし、遊んでいる——

S「おさかなさん、目があったほうがいいよ」私「じゃあ、書きにいこうか」（立ちあがろうとする）S「いいよ、いいよ」少しして、「ぼく、書いてくるね」黒クレパスでうすく目をつけて戻ってくる。

S「木、つくってくるね」

私「おねがいますね。待ってるわ」

小さく切った紙を丸めてたため、セロテープでつけ、その上から、きみどり色にぬってある木を持ち、「できたよ」とへやからでてくる。——いつもの表情になっていたのでホッとす——

ままごとの子どもたちから「先生、ごちそう食べにきて〜」え」と呼ばれたのを機に「ごちそう食べに行ってくださいね」とその場から離れる。廊下での遊びも一段落し、Sは友だちといっしょにへやへはいつてきて、マジックで絵を書き始める——。

帰りには、ニコニコと「さよなら」を言ってくれた。

——Sは、からだ全体を使って遊んではいなかったが、小さくても自分で遊びを見つけて遊んでいる子どもであり、Sなりに楽しんでいる。と見ていたので驚いてしまった——

六月十九日

Sがどのような顔をして登園するか、私は重大なテストを受けるような気持で待っていた。Sは、かばんと帽子をつけたま

ま「おはよう」と走ってきてくれた。

——重かった心が、急に軽くなったように感じられた——

六月になり、子どもと私とのつながりについて、「朝の受けいれをしっかりしておいたらよい」とすっかり安心してしまい、「遊びをどう伸ばすか」ということばかりに気をとられていたように思われる。

Sをほんとうによく見ていたら、へやへはいりたくなくなる前に、何か別の小さな合図を出しているのに気づいたのではないか。それに働きかけをしていたら悲しい思いをさせずにすんだのではないかと考える。

頭の中で考えると、子どもといっしょになって遊びを伸ばしていくことが即、子どもとのつながりを深めていくことなのに……。四月から今まで、一生懸命に子どもを見ていたはずなのに、何を見ていたのだろうか。

Sに大きな合図を出してもらって以来、ひとりひとりが力を存分に出し、満足感を得て、きっぱりとした顔つきで帰ることができているか、を考えて、子どもの目、表情、動き、を見ている。子どもをほんとうに見るのには、どんな心が必要なのだろうか、子どもの心を感じる心とは……。子どもたちから教えてもらえるように、からだ全体を使って考え、毎日の保育を大切にしていきたいと思う。

（千代田区立富士見幼稚園）